

紙つづて

音楽学部の学生にイタリア語を教
えていた時の話。日常会話にさまざ
まな略語が登場する。リハ、ゲネプ
ロ、コレペティ、オケピ、と聞いて
いるだけで音が楽しい。

ある時、声楽専攻の学生が「今
度、あいみようなんです」と言っ
つ。

「あいみようっ」

「愛の妙薬です」

ドニゼッティ作曲のオペラ『愛の
妙薬』のことだ。この歌劇はハッピ
ーエンドに終わる。主人公のネモリ
ーノ役と言えばパヴァロッティ。薬
を飲んだ時の演技がひときわさえ
る。トリノの冬季オリンピック開会
式で『誰も寝てはならぬ』を聞かせ
てくれた往年の名テノールである。

あいみよう

武田 好

愛の妙薬とは、いわば惚れ薬で、
その効能が物語の鍵となる。

惚れ薬と聞くと、大抵の人は、飲
んだ本人が誰かを好きになってしま
うと考えるが、実は違う。それを飲
むと、飲んだ本人が好きな人から愛
されるといふ効き目なのだ。もし私
がパヴァロッティを好きならば、私
が「愛の妙薬」を飲んだとたんぱ
ヴァロッティから惚れられてしまっ
つというわけである。

十九世紀の作曲家ドニゼッティは
イタリア北部ロンバルディア州の町
ベルガモの生まれ。この町の歴史地
区は丘の上にあつて、新市街からケ
ーブルカーで登つていくと、眺望の
よい中世の街並みへと入る。中央の
広場にある教会堂に、ドニゼッティ
は天使像に囲まれ眠つてゐる。

(静岡文化芸術大教授)

2020.5.9

2020.5.9

中日新聞(夕刊) P.1